

この箇所はパウロの手紙には見られない「キリスト教家庭道徳訓」であり、家庭内の倫理が記されている箇所です。ここでは、夫と妻、親と子ども、主人と奴隷という三つの人間関係について、簡潔な倫理的勧告、「妻は夫に仕えなさい」、「子どもたちは両親に従いなさい」、「奴隷は主人に従いなさい」が説かれています。この家庭訓は、当時のヘレニズム・ローマ社会で一般に認められた家庭倫理をそのまま踏襲しています。今日の箇所では「仕えなさい、従いなさい」という言葉が「主を信じる者」「主において」という言葉を伴って繰り返されています。果たして神さまと人との主従関係を夫婦や家族の関係に持ち込むべきなのでしょうか。決してそうでないと思うのです。聖書から読みとれることは、人と人との関係はどこまで行っても上下(縦)の関係ではなく、「隣人を自分のように愛しなさい」と記されているように、神さまの下に等しい横の関係でしかありえないはずだからです。また、上位に立つ者(夫、父親、主人)に、下位の者(妻、子どもたち、奴隷)への配慮をするように勧められています。このような新たな関係は、キリスト者の心情を共有する教会内においてであって、それは社会の枠組みを構成している家父長制そのものを変えるものではありませんでした。しかし、父親たちの子どもに対する「いらだたせてはならない」という勧告や主人の奴隷に対する「知ってのとおり、あなたがたにも主人が天におられるのです」という勧告にみられるように、この手紙はキリスト教にある倫理を古い社会の枠組みの中に植え込むことにより、将来の変革の種子を蒔いたと言えるかもしれません。もちろん、今日の箇所に見られるように聖書の文書にも時代的、社会的制約から完全に自由ではありません。ここで記されている家父長制社会の家庭訓の倫理をそのまま現代に適用することはできません。この手紙の記述が、家族の関係を固定化させ、男性優位の主従関係を維持する役割を果たしてきたことは否定できません。また教会がしばしば家族や夫婦のあるべき姿を一方向的に押し付け、そのことによって家族関係に悩む多くの人々を傷つけてきたこと、そして今も傷つけ続けていることを忘れてはなりません。家族相互の関係や役割は、固定的なものではなく、常に変化し続けるものです。私たちは、現代社会の状況の中で、主にある者として生きる道を模索し、主にある家庭像を構築する努力をしなければなりません。今後家族のあり方はますます多様化していくと思われます。教会の使命は多様な家族関係において、神さまの言葉に聞きつつ新しい共同体を創り出していくことではないでしょうか。